

*****プロフィール Profile*****

◆パイプオルガン 萩野 由美子 (おぎの ゆみこ)

神奈川県出身。湘南白百合学園高等学校を経て、東京芸術大学音楽学部器楽科オルガン専攻、及びデュッセルドルフ音楽大学卒業。オルガンを島田麗子、廣野嗣雄、J. ゲッフエルトの各氏に師事。帰国後はNHK-FM放送やサントリーホール、横浜みなとみらいホール、石川県立音楽堂、東京カテドラルマリア大聖堂など、日本各地のコンサートホールや教会等においてソロ演奏を行っている。またオーケストラ・アンサンブル金沢、N響団友オーケストラなどと共演する。ソロ活動のほか、室内楽・合唱団の伴奏やオーケストラでのオルガン担当など幅広い演奏活動を行っている。また、レクチャーコンサートや講習会を通じてオルガンの普及教育活動にも力を注いでいる。



現在、カトリック碑文谷サレジオ教会オルガニスト、北とぴあオルガンアドバイザー、洗足学園音楽大学講師。日本オルガニスト協会、日本オルガン研究会会員。



☆コンサートのあとはティータイムで「ほっと」リラックス☆

演奏終了後もホールのロビーをオープンして、
ビュッフェでドリンクとお茶菓子を販売します。
壮大なオルガン演奏のあとも、ロビーでゆっくりとした時間をおすごしください。



★所沢市民文化センターMUSE★

“お昼どき” パイプオルガン
500円コンサート



オルガン / 萩野由美子

2008年4月25日(金) 14:30開演
所沢市民文化センター ミューズ アークホール

MUSE ARK HALL

主催：(財) 所沢市文化振興事業団



★プログラム★ PROGRAM



◆J.S.バッハ(1685-1750) : 前奏曲とフーガ イ短調BWV543

バッハはヴァイマル時代(1708~17)に、当時の音楽先進国イタリアの作曲家ヴィヴァルディやアルビノーニなどの音楽に出会い、自らクラヴィーアやオルガンのために編曲しています。この曲もバッハがその時代に出会ったイタリア音楽の影響が色濃く見受けられます。イタリア的な端正で豊かに流れる旋律と、北ドイツ的な力強く幻想的激情を見事に融和させた名曲と言えるでしょう。



◆J.パッヘルベル(1653-1706) : カノン

パッヘルベルはJ.S. バッハと同じ中部ドイツで活躍した作曲家で、バッハも幼少時代、彼の作品を一生懸命写譜してその作風を学びました。皆様よくご存じのこの曲は1680年ころに作曲された、もともとは弦楽合奏のための曲です。曲の最初から最後まで、低音がレ→ラ→シ→ファ#→ソ→レ→ソ→ラ と同じ動きを繰り返し、上声部には美しい旋律が次々と現れます。

◆近藤 岳 : 「春うらら」 ~日本の春の歌による~

日本の素晴らしいところは『四季』があるところではないでしょうか。日本人は季節の移り変わりを木々や花々を愛で、旬を味わい、祭りや風習などを大切に守ることで身近に感じ、楽しむことができました。

そしてきっと皆さんには、それぞれの季節の情景の中に浮かぶ様々な思い出と共に、思わず口ずさみたくくなるような『懐かしい日本の歌』があるのではないのでしょうか？



◆R.シューマン(1810-1856)

: 「ペダル・ピアノのための6つのカノン風小品」

op.56 より 第4番 変イ長調



1844年シューマンは生涯苦んだ心の病を悪化させ、ライプツィヒを後にドレスデンへと移住しました。新天地では妻クララへのレッスンという形で対位法の研究に没頭し、オルガン練習のために借りた“ペダル・ピアノ”で新しいピアノ音楽の可能性を試みます。こうした作業を通じて心の健康を取り戻したシューマンは徐々に創作力も回復させ、その後『ピアノ協奏曲』や『交響曲第2番』などを世に送り出すのです。“ペダル・ピアノ”が消滅してしまった現在も、この曲集は『スケッチ』『バッハの名による6つのフーガ』と共にオルガンのレパートリーとなっています。



◆C.フランク(1822-1890) : コラール 第3番 イ短調

フランクは、ベルギーのリージュでゲルマン系の家に生まれ、パリ音楽院オルガン科教授、聖クロチルド教会オルガニストとして生涯の大半をパリで過ごしました。カヴァイエ・コルの手によるオーケストラ的色彩を持つ名オルガンとの出会いにより、12曲のオルガン曲を残しています。『3つのコラール』は、コラールといってもその旋律は讃美歌やグレゴリオ聖歌に基づくものではなく、いずれもフランク自作の旋律によるものです。『コラール第3番』は、アレグロ/アダージョ/アレグロの3部分から成り、集結部では冒頭の16分音符の音型とコラールが見事に融合され、壮大なクライマックスが創り出されてゆきます。